

## 「パチョーリ簿記論」の特徴についての考察

片岡 泰彦

### 第1節 まえがき

世界で最初に出版された簿記・会計に関する文献は、ルカ・パチョーリの「スムマ」すなわち「算術・幾何・比及び比例全書」(Summa de Arithmetica Geometria Proportioni et Proportionalita)である。この数学書は、1494年11月10日にヴェネツィアで出版された。印刷兼出版業者は、ブレスチアのパガニーノ・デ・パガニーニ(Paganino de Paganini di Brescia)である。一般に「パチョーリ簿記論」と呼ばれているのは、第1部・第9編・論文第11の「計算及び記録に関する詳説」(Particularis de Computis et Scripturis)の部分である。

スムマ第2版は、1523年12月20日にガルダ湖近くのトスコラーノ(Toscolano, sul lago di Garda)で、パガニーノの息子のアレッサンドロ(Alessandro del Figlio di Paganino)によって出版されている。

かつて、イタリア・ルネッサンスの歴史学者であるヤーコプ・ブルク・ハルト(Jacob Burckhardt)は、15世紀までの数学と自然科学におけるイタリアの卓越した人物として、パオロ・トスカネッリ(Paolo Toscanelli)とレオナルド・ダ・ヴィンチ(Leonardo da Vinci)と並んで、パチョーリの名前をあげている<sup>1)</sup>。また、リトルトンは、名著『会計発達史』(Accounting Evolution to 1900)の中で、パチョーリを近代会計学の父(the father of modern accounting)と称し、高く評価している<sup>2)</sup>。

一方、フォビオ・ベスタ(Fabio Besta)は、彼の有名な「会計学」(La ragioneria)の中で、パチョーリの簿記論に対して、痛烈な批判をしている。

パチョーリ簿記論の部分は、1460年ごろ、一人のヴェネツィア人によって書かれた複式簿記のコピーにしかすぎない。つまり、パチョーリは、複式簿記の知識などはなかったというのである<sup>3)</sup>。しかし、このベスタの剽窃論には、多くの誤解があるように思われる。

そしてベスタの剽窃論を否定し、パチョーリ簿記論を高く評価しながらも、簿記論の内容そのものを批判した学者に、ヤーメイ<sup>4)</sup>とエステベ<sup>5)</sup>がいる。

ここでは、パチョーリ簿記論の特徴をあげ、その特徴を分析することによって、パチョーリの簿記論の内容をより明確にすることを試みる。

## 注

- 1) Jacob Burckhardt, "The Civilization of the Renaissance", Rondon, 1944, p. 175.  
Basil Yamey, "Commentary on Pacioli's De Computis et scripturis", in Luca Pacioli, Exposition of Double Entry Bookkeeping, Venice, 1494, p. 30.
- 2) A.C.Littleton, "Accounting Evolution to 1900", New York, 1966, p. 3.
- 3) Fabio Besta, "La Ragioneria, Ragioneria Generale", Volume III, Milano, pp. 363-368.
- 4) Basil Yamey, op. cit.
- 5) Esteban Hernandez-Esteve, "Comments on some obscure or ambiguous points of the treatise de computis et scripturis by Luca Pacioli", The Accounting Historians Journal Vol. 21, No.1, June1994.

## 第2節 簿記論の特徴

## (1) 全体を通して宗教的論述が多く見られる

簿記論の全搬にわたり、宗教的傾向が極めて強い。例えば、第1章では、「なぜなら、すべての人は、カトリックの信仰によって救われるからである。この信仰なくしては、神の恵みは不可能である。」(con cio sia che in la fede cattolicamente ognuno si salvi e senza lei sia impossibile piacere a Dio), また第2章で「そこで、神の御名とともに、彼の仕事を始めなければならない。そして、すべての彼等の記入の初めに、聖なる御名を心に抱くのである。」(E però sempre con lo nome de meser Domededio debiano commenzare loro facende, e in nel principio d' ogni loro scripture el suo sancto nome haver a mente eē..) と記述している。また、第4章において、「しかし、たえず、特にまず神を、すぐ目の前に置きなさい、そして、朝のミサを聞くことを決して怠ってはならない。」(Ma sempre sopra tutto prima Ideo, el proximo te sia avanti gli ochi e mai non manchi da l' udire la messa la matina), 「愛情があれば富を失わないように、ミサを聞けば道を失わない。」(Nec caritas opes, nec missa minuit iter eē) と論じている<sup>1)</sup>。

この宗教的傾向は、パチョーリが、フランチェスコ (Francesco) 修道会のコンヴェンツァル (conventuale) 派の修道僧であったことと深く関係している。パチョーリは、1475年前後に、フランチェスコ派の僧団に入団し、修道僧となっている。したがって、簿記論の中にキリスト教に関する用語が多く用いられたことは当然なことである。ただし、ここに宗教上の大きな問題がある。

フランチェスコ修道会の起源は、アッシジ出身の聖フランチェスコ (1182年頃～1226年) が、1210年に教皇イノセント3世から、小さき兄弟会という修道会の設立の許可を受けたことに始まる。この修道会は、平等の権利と義務を持ち、財産に対しては使用权のみを認め、所有権を認めないとする規律があった。すなわち、財産、金銭の所有を否定するという思想的概念が根底にあった。

しかし、聖フランチェスコの死後、修道会の中から、財産の所有権を認めようとする運動が起

こってきた。この運動の一派がコンヴェンツァル派である。コンヴェンツァル派は、教皇庁の保護を受け、それまでの小さき兄弟会の基本概念であった所有の貧しさ、金銭所有の禁止、托鉢の仕事の廃止へと発展した。

しかし、14世紀後半になると会則を厳しく守ろうとするオブセルヴァンテス改革運動が起こり、両者の対立は激化した。1517年、教皇レオ10世は、小さき兄弟会の問題を解決するため、大会を開いた。その結果、オブセルヴァンテスとコンヴェンツァルは分裂した。そして前者はフランチェスコ会、後者はコンヴェンツァル・フランチェスコ会となった。

そして、パチョーリが所属したのは、後者のコンヴェンツァル・フランチェスコ会であった。

したがって、パチョーリは、フランチェスコ修道会の修道僧であったが、財産権、金銭に対する執念にはすさまじいものがあった。

例えば、商人に最も重要なものの一つは、現金と資産であると主張し、自分の残した財産を関係者に相続させるため、2回も遺言書を書いているのである。

すなわち、パチョーリは、コンヴェンツァル派であったので、自ら財産を所有し、資産と現金の重要性を主張したことは、当然のことと言える。

また、修道院と複式簿記の関連性を考えることができる。当時の修道院は、重要な経済的活動を遂行していた。例えば、ワイン、穀物、動物等を生産そして売却する方法、土地の貸借によって地代を受け取る方法、小作人から小作料を受け取る方法等により利益を得ているのである。

その際、修道院内の経済活動は、複式簿記をもって記録されたのである。

パチョーリの後に出版された、ベネデット教団の修道僧のピエトラ (Pietra,1586年) やイエズ会の修道僧のフローリ (Flori,1636年) の簿記論の中では、ヴェネツィア式簿記に従って、資産勘定、負債勘定、残高勘定、資本金勘定、損益勘定等が記録されているのである。

修道院の中にこそ、複式簿記があり、パチョーリは、修道僧であったからこそ、複式簿記の知識を持ち得たとする見解もあり得る。したがって、複式簿記と宗教は深い関係があると主張することができるのである。

## 注

- 1) パチョーリ簿記論の日本語訳については、すべて拙著『イタリア簿記史論』森山書店、1988年によった。

## (2) 商人に必要な三つの主要な事柄について解説

パチョーリは、簿記論の第1章で、「注意深く商売をしようとする人にとって、三つの主要な事柄 (tre cose maxime) が必要である。」と解説している。

第1が、「現金とすべての、実在するその他の資産」(pecunia numerata e ogni altra faculta substantiale) である。第2が、「善良な会計係と敏腕な計算係」(buon ragioniere e pronto computista) である。第3が、すべての取引を借方と貸方に順序よく整理すること (bello ordine) である。

第1の事柄では、「現金」として *pecunia numerata* (=数種類の貨幣) という言葉で表現している。

ただし、第12章、第15章等他の章では、「現金」を *la cassa* という言葉で示している。

二つの用語の相違点は、*la cassa* は単に現金という意味であったのに対し、*pecunia numerata* は、数種類の貨幣さらに銀行預金等を意味したように思われる。すなわち、当時の都市国家は、それぞれの貨幣を製造していたので、各都市によって、その価値が異なっていた。したがってそれらを合わせた数種類の貨幣及び預金等をさすのである。

「すべての実在するその他の資産」の内容については、パチョーリが第3章で論述した財産目録 (*Inventario*) の内容と同様のものと思われる。

すなわち、宝石、衣類、茶碗、さじ、フォーク、テーブル、ハンカチ、ベッド、羽毛のふとん、商品、毛皮、家屋、土地等を含むのである。

第2の事柄は、商人自身が善良な会計係であり、敏腕な計算係であるべきというのである。

これは、商人自身が、正確に帳簿を記録する性格を持つこと、さらには記録上算術・計算の能力のあることを要求しているものと思われる。

第3の事柄は、現金及びその他の資産等を、正直に記録・計算するに際しては、借方と貸方に順序よく整理する複式簿記 (パチョーリは複式簿記という用語は使用していない) によって処理されるべきというのである。

### (3) ヴェネツィア式簿記の採用

パチョーリは、簿記論の第1章において、「そして、他のうちでは、確実に賛美されているヴェネツィア方式を、我々は採用しよう。そしてこの方式こそ、すべての場合に応用できるものである。」 (*E serviremo i esso el mode de vinezia : quale certamente fra gli altri e molto da commendare. E mediante quella i ogni altro se porra guidare*) と記述している。

この文章は、2つの重要な意味を持つ。

第1は、パチョーリは、自ら複式簿記の発明者ではないことを明らかにしていることである。

複式簿記は、13~14世紀のイタリアに生誕したもので、パチョーリは、それを文献として初めて出版したのである。写本ではあるが最初に論文として執筆した著者は、ベネデット・コトルリである。

第2に、パチョーリは、「ヴェネツィア式簿記」を採用したと自ら述べていることである。パチョーリは、ヴェネツィア式 (*mode de vinezia*) といっているが、複式簿記 (*libro doppio, partita doppia, scritta doppia*) とは記述していないのである。当時は、まだ複式簿記という用語が使われていなかったようである。この複式簿記という用語を採用した最初の著者は、ドメニコ・マンゾーニ (*Domenico Manzoni*) と言われている。マンゾーニは、自分の著書名に、「複式元帳」 (*Quaderano doppio*) という用語を使ったのである。

「スママ」はヴェネツィアで出版された。そしてパチョーリは、長期間ヴェネツィアに滞在し

た経験を持つ。特にアントニオ・デ・ロンピアージの3人の息子の家庭教師となった時、商人の実際の実務から複式簿記の知識を得たと言われている。

しかし、パチョーリが論述した簿記が、パチョーリの主張するように、本当にヴェネツィア式であったかどうか、またそうであるとすれば、ヴェネツィア式簿記とは何であったのか。これについては、多くの議論がなされてきたのである。例えば、かつてベスタ (Besta) は、パチョーリの複式簿記の知識を否定する見解を発表した。パチョーリは複式簿記の知識を得るに十分な時間をヴェネツィアで持てなかったというのである。そして、このベスタの見解は、パチョーリの剽窃論にまで発展したのである。

しかし、このベスタの見解は、ヤーメイも反論しているように、当然否定されるべきである<sup>1)</sup>。パチョーリがヴェネツィアに滞在し、ヴェネツィアの商人の家で、商業実務の知識を知り得たということは、十分可能なことであった。

ヴェネツィア式簿記の特徴について、ヤーメイは2つのことをあげている<sup>2)</sup>。1つ目が元帳の形式である。アラ・ヴェネツィアーナ (alla veneziana) として知られる元帳形式は、左頁に借方を右頁に貸方を持つ、2頁1対の対照を持つ勘定形式であるというのである。

この元帳形式は、ヴェネツィアに起源を持ち、他のイタリアの都市国家へ伝わった。この形式が伝わる以前のトスカーナやジェノヴァでは、同頁に借方と貸方が記入されていた。そして、この「スムマ」の出版によりこの形式がイタリア中に広まったというのである。

2つ目は、仕訳帳の採用と貸借用語の *Per* と *A* である。

15世紀末まで、ヴェネツィア以外では、仕訳帳は採用されておらず、*Per* と *A* の貸借用語も見られない。そして15世紀のヴェネツィアでは、アンドレア・バルバリゴが仕訳帳を採用し、貸借用語に *Per* と *A* を記入しているのである。

ヤーメイの主張する1つ目の特徴については必ずしも賛成できない。

確かに、アンドレア・バルバリゴやジャコモ・バドエルの元帳、そしてソランツォ兄弟の旧元帳のように、左頁・借方を右頁・貸方を記入する帳簿が現存している。

しかし、ソランツォ兄弟商会の新元帳のように、1頁に左右・貸借を記入する帳簿も存在する。左頁借方、右頁貸方とする元帳形式をヴェネツィア式簿記とすることは、疑わしい。

2つ目の特徴については、賛成できる。当時の他の都市の会計帳簿は、元帳のみへ転記で仕訳帳は見当たらない。しかし、ヴェネツィアでは、アンドレア・バルバリゴが、早くから仕訳帳を採用し、元帳へ転記しているのである。

#### 注

1) Yamey, op. cit., p. 21.

2) Yamey, op. cit., pp. 20-21.

#### (4) 三帳簿制を採用

パチョーリが正式な帳簿組織として解説したのは、日記帳 (memoriale, squartafolio, vachetta),

仕訳帳 (giornale) そして元帳 (quaderno) である。

パチョーリは、第5章の中で「第1を日記帳、第2を仕訳帳、第3を元帳と呼ぶ」(L uno ditto memoriale. E Laltro detto Giornale. L altro detto Quaderno) と記述している。

ただし、ヴェネツィアのみならず、他の諸都市でも、当時は一般に三帳簿制は採用されていない。主として、元帳を中心とする帳簿制が圧倒的である。

例えば、1340年のジェノバ市庁の財務帳簿、ミラノのカタロニア商会の元帳 (1395～1398年) そしてヴェネツィアのソランツォ兄弟の旧元帳 (1410～1417年) と新元帳 (1406～1434年) 及びジャコモ・バドエルの元帳 (1436～1439年) 等すべて元帳のみによる帳簿である。日記帳及び仕訳帳は存在しない。ただ、バルバリゴの会計帳簿 (1430～1582年) のみが、仕訳帳と元帳の二帳簿制を採用しているのである。日記帳にいたっては、その帳簿の存在が皆無である。

しかし、パチョーリの「スママ」出版の36年前の1458年に、複式簿記の原稿を完成させた、ベネデット・コトルリも、日記帳、仕訳帳そして元帳の三帳簿制を解説している。コトルリは、原稿の中で「記憶に頼ることは、無知の論理である。したがって、商人は3冊の帳簿、日記帳、仕訳帳、そして元帳を記帳すべきである。」(fiducis intellectus et loyce ignorancia, Deve adonche lo mercante tenere ad minims tre libri çoe, recordançe, giornale et libri grande) と記述している。

当時のイタリアでは、このパチョーリが解説した3帳簿制は、実務上は必ずしも一般的とは言えないが、実際に存在していたのである。したがって、ここでは3冊の帳簿について解説する。

#### (イ) 日記帳

パチョーリは、第6章の中で日記帳 (memoriale) を、記録簿 (vachetta) またはスクアルタフォーリオ (sq̄rtafoglio=Squartafoglio) と呼んでいる。そして、「売買に関するすべての事柄を、略記することなく、広く、明確に記述するのである。」と述べている。

そして、日記帳には、営業に関するすべての事項を記入し、他人の目にふれることになる。しかし財産目録に記録された、動産や不動産は、この日記帳に記入しない方がよいと解説している。

前述したように、この日記帳については、当時、実際上の例が見あたらない。ただし、13世紀から15世紀にかけて、トスカーナを中心に商人の間で採用された「覚書」(libro di ricordanze, ricordanze) と同様のものと解することは可能である。この「覚書」には、父親の遺言、財産、相続、結婚、子供の出生、死亡等にもなう財産の移動、会社の設立、出資金の明細、土地家屋の購入等が記録された。

これは商人が自分の家の中で発生した私的な事柄をも記録する秘密帳簿であった<sup>1)</sup>。この「覚書」には、取引はむろんのこと、あらゆる重要事項が記入されている。したがって、パチョーリの日記帳が、この「覚書」と同様のものと考えられるのである。そして、この覚書すなわち日記帳から仕訳帳へ、移記されたこともあったのである。

さらに、この日記帳は、パチョーリ以後、イタリアのみならずドイツ、イギリス、オランダ等の簿記文献の中では正式な帳簿として採用され、解説されている。

例えば、イタリアでは、マンゾーニ (Manzoni, 1534年)、ピエトラ (Pietra, 1586年) 等が日記帳を正式な帳簿として解説している。

ドイツでは、ハーゲル (Hager, 1624年)、シュルツ (Shurtz, 1695年)、ヘルムリンク (Hermling, 1685年)、ラーデマン (Rademan, 1682年)、ハーベリウム (Habelium, 1707年)、ハイネ (Hyne, 1752年)、マーゲルセン (Magelsen, 1772年)、フライシャー (Fleischer, 1781年) 等は解説のみならず、正式な帳簿として例題の中に加えたのである。

オランダでも、クーテレーズ (Courterels, 1603年)、ヴェニンゲン (Waningen, 1672年)、フォーチヒ (Foertsch, 1765年)、アウトハフ (Oudschaff, 1833年) 等が日記帳を正式な帳簿として解説し、例題の中で作成している。

イギリスでも、ダフォーン (Dafforne, 1635年)、コリンソン (Colinson, 1683年)、ハウキンス (Hawkins, 1704年)、ノース (North, 1714年)、マギー (Macghie, 1718年)、マルコム (Malcolm, 1731年)、ステフェンス (Stephens, 1735年)、ハミルトン (Hamilton, 1735年) 等が日記帳を正式な帳簿として解説し、例題の中で示している。16世紀から18世紀にかけてのヨーロッパで、正式な帳簿として認められた日記帳を含む帳簿組織は、アメリカへ渡り、アメリカから日本へ、福沢諭吉、加藤斌さらには小林儀秀等によって紹介されたのである。

#### (ロ) 仕訳帳

パチョーリは、仕訳帳 (gionale) について、第10章と第11章及び第12章で解説している。第2の重要な商業帳簿 (Del secondo libro principale mercantescio) である仕訳帳は、日記帳と同じ印をつけ、頁数をつけなければならない。そして各頁の最初に、年号と日付を記入し、財産目録及び日記帳の記入項目を、すべて移記するのである。

仕訳帳において重要なことは、借方 (Per) と貸方 (A) の2つの用語である。この用語は、最も高貴な都市・ヴェネツィア (nela cita maxime excelsa de Vinegia) で使用されているのである。

そして、借方は1人以上の債務者 (debitore) を示し、貸方は1人以上の債権者 (creditore) を意味するのである。

このパチョーリが解説したPerとAは、ヴェネツィアのアンドレア・バルバリゴが実際に採用して居り、他の都市では、仕訳帳の例が見られない。したがって、このPerとAは、パチョーリが言うように、ヴェネツィア独特のものであったといえよう。

第11章で、パチョーリは、借方と貸方を区分する方法として、2本線 (due virgoletto) すなわち2本の縦線 (||) を使うよう解説している。この解説は奇妙であり、大きな疑問を多くの会計史学者に投げかけてきた。

まず、パチョーリは、原典の第11章の中で2本の縦線 || を示しておきながら、第12章及び第18章等では、貸借を区分する方法として、2つの点:を例題で示しているのである。この2つの方法の提示は矛盾している。どちらかにすべきであった。さらに、このvirgolettoとは、縦線ではなく斜線を意味しており、2本の斜線 (//) を示すべきであった。

パチョーリ以前、実務上アンドレア・バルバリゴは、貸借区分に何の印も使っていない。パチョーリ以後、タリエンテはコンマ（,）で、マンゾーニやカサノヴァでは2本の斜線（//）で、さらにモスケッティは、2本の横線（=）を採用している。

これについて、ヤーメイは、「この手ぬかりは理解に苦しむ。そしてパチョーリ簿記論の何人かの近代の翻訳家達を混乱に陥れた。例えば特に、現代のイタリア語の最初の翻訳者であるジッティは、原文では（||）で示されているvirgolettoを（?）の印で示し、誤訳してしまった<sup>2)</sup>。」と述べている。

確かに、ジッティは、なぜかdue virgolettoを（?）の印で示し、誤訳してしまった。

しかし、イタリア語第2の翻訳者アンティノーリ（Antinori）は、1959年の訳本では、due virgolettoを、2つの点（:）で示した<sup>3)</sup>。しかし、1994年の訳本では、これを2本の斜線（//）に変えている<sup>4)</sup>。ペンドルフは、パチョーリはvirgolettoという言葉を使いながら、例題では2つの小さなコンマ（:）で示していると注記しておいて、訳文では2本の斜線（//）で表している<sup>5)</sup>。

また、スペイン語の翻訳者エステベ（Esteve）やフランス語の翻訳者ジャンニク（Jouanique）は、そのまま2本の縦線（||）で示している。

#### （ハ）元帳

パチョーリは、元帳（Quaderno）について、第12章から第16章にかけて、詳述している。

パチョーリは、第13章で元帳（Quaderno）を、最後の主要な商業帳簿（ultimo libro principale mercantescio）または偉大な元帳（Quaderno grande）とも呼んでいる。そして、この元帳には、財産目録および仕訳帳に記入されたすべての項目が転記されるのである。仕訳帳から元帳へ転記された場合は、転記済みであることを示すため、仕訳帳の借方欄と貸方欄に、それぞれ1本の斜線（/）、合計2本の斜線を引くのである。1本は借方線（linea de dare）、もう1本は貸方線（linea de avere）と呼ぶのである。

さらに、仕訳帳の余白に、元帳の借方と貸方の頁数を上下に重ねて記入するのである。この数字によって、仕訳帳の借方項目と貸方項目が元帳の何頁に転記されたかが明白となるのである。

この2本の斜線による抹消と2つの数字による転記済の方法は、1430年に始まるアンドレア・バルバリゴの仕訳帳において遂行されている。

そしてパチョーリは、元帳における重要な2つの用語である現金（Cassa）と資本金（Cavedale）について解説している。現金は常に債務者（debitrici）として記入すべきで、債権者（creditrices）となることはなく、債務者かまたは貸借平均（pare=pari）の際に記入すべきである。さもない場合は誤りであるとしている。しかし、この点、パチョーリはなぜそうなるのか理由を明白にしている。現金が常に借方記入であることと共に、なぜ貸借平均の際、記入するべきかについては理解しにくい。

また、資本金は、常に債権者（creditrices）となるべきで、決して債務者とならないと解説している。しかし、資本金は、債務者すなわちマイナスになることはあり得る。



例えば、1586年にマントヴァで出版されたピエトラ (Pietra) の文献では、資本金額がマイナスとして計上されている。また、1563年にアントウェルペンで実際に記帳されたクリストファー・プランタン (Christopher Plantin) の仕訳帳では、マイナスの資本金及び現金が示されている。すなわち、(借方) クリストファー・プランタン××// (貸方) 現金××の形式である。

パチョーリは、マイナス資本金及び現金の概念をまだ理解していなかったことになる。

#### 注

- 1) 徳稿 曜「中世イタリア商人の覚書」地中海学研究XV, 地中海学会, 1992, 98頁参照。
- 2) Yamey, op. cit., p. 111.
- 3) Carlo Antinori, "Luca Pacioli, Summa de Arithmetica, Geometrio, Proportioni et Proportionalita", Milano, 1959, p. 32.
- 4) Carlo Antinori, "Luca Pacioli, E la Summa de Arithmetica", Roma, 1994. p. 77.
- 5) Balduin Penndorf, Luca Pacioli, Abhandlung iiber die Buchhaltung 1494, Stuttgart, 1933, S. 104.

### (5) 開業財産目録を解説

パチョーリは、第2章と第3章で開業時の財産目録について解説している。例えば、第2章で「そして、商人は、まず第1に、次のような方法で、財産目録を注意深く作成することが必要である。」(E pero prima conven che facia suo diligente Inventario in questo modo) と記述している。このことは商人が、商売を始めるにあたり、まず財産目録を作成し、商人が所有するすべての財産を記入するべきであることを意味している。

さらに、第3章では、財産目録の模範例を示している。先ず、神へ祈りを捧げた後、15の項目をあげている。

その内容は、現金、宝石、衣服、茶碗、フォーク、テーブル・クロス、羽毛のベッド、商品 (mercantile)、毛皮、建物、土地、預金、貸付金等の資産及び借入金等の負債である。

しかし、パチョーリは、元帳締切後の財産目録については何も解説していない。したがって、パチョーリは開業財産目録については解説したが、決算財産目録については何も記述していないというのが通説である。

しかし、パチョーリは、第34章において、「あなたのすべての財産目録」(tutto tuo inventario) と表現している。このinventarioは、内容的には、「財産目録」というよりは「財産」と訳した方が適当である。ただし、パチョーリは、その前に「財産」として *faculta* という言葉を使っている。したがってパチョーリは、*faculta* と *inventario* を同意語に使っていたことになる。そして、*inventario* という言葉は、第2章と第3章では「財産目録」として、第34章では「財産」として用いられたことになる。したがって、パチョーリは、決算時の財産目録を意識しながらも、まったく解説しなかったことになる。

### (6) 時価主義・高価主義の採用

パチョーリは、第12章の財産記入の際の資産評価の説明において、時価主義及び高価主義を採

用している。すなわち、「あなたは、あなた自身のために、時価をつけなさい。それは低いよりもむしろ高くしなさい。すなわち、20の価値があると思われるなら24等にしなさい。このようにして、あなたが利益をあげるのは良いことである」(Ponedoli tu per te un comun pregio. E fallo grasso piu presto che magro cioe, Se ti pare che vaglino 20, e tu di. 24 eē. Acio che meglio te habia reuscire el guadagno)と解説している。すなわち、資産の評価に際しては、時価で評価し、なるべく高い価値をつけるようにしなさいというのである。

しかし、このパチョーリの見解は、マンゾーニ、カサノヴァ、モスケッティそしてインピン等によって引き継がれなかった。

ピエトラは、一般価格と時価について解説したが、むしろ低価主義を主張している。

メリスは、パチョーリが解説した資産評価の方法は、資産の過剰評価(plus valutando le attività)による利益の架空誇大化(un gonfiamento fittizio degli utili)によって資本の過剰評価を導いていると述べている。さらに、実際にそのようなことが遂行されていたことは確信できるが、ピランチオの不実記入の認識を生じせしめる可能性がある」と記述している<sup>1)</sup>。

そして、ヤーメイも、この文章に対して、批判をしている。

パチョーリの財産目録(または残高勘定)の資産の過剰評価は、パチョーリの明解な提案にもかかわらず、商人の利益そのものを増加させることはできない。したがって、パチョーリは鈍感か気まぐれか、さもなければ頭の中は巧妙でありかつ不可解であった。パチョーリが提案した過剰評価は、特にだまされやすい顧客のために企画された。なぜなら、もしこのようなことが実際にあるとすれば、売却用の商品はインフレ時の価格で元帳に記録されるべきであったからである。しかもパチョーリは第7章において、1つは買い手にもう1つは売り手に示すため2冊の元帳を記入する商人を特に非難しているのである。

したがってパチョーリの主張は確かに奇妙であるというのである<sup>2)</sup>。

思うに、現在の会計学的観点からみるならば、高価主義は多少奇妙である。しかし、パチョーリ自身が言っているように、当時のヴェネツィアの実務を参照したものとすれば、当然実際上は納得できることである。また近代の時価主義会計等から見れば理解できる解説と言えよう。

## 注

1) Federigo Melis, Storia Della Ragioneria, Bologna, 1950, p. 632.

2) Yamey, op. cit., p. 119.

## (7) 年度締切を記述

従来、パチョーリは、年度決算は知らないとする考えが通説である。パチョーリが説いた元帳締切の方法は、旧元帳勘定の記入が一杯になって記入の余白がなくなった場合に、新元帳へ繰越す方法である。したがって、年度末に元帳勘定を締め切る方法は知らなかったというのである。

しかし、パチョーリは、第29章で「しかし、毎年締切るとはいつもよいことである。特に会社にいる人にはそうなのである」(Ma Sēpre e buono desaldare ognanno massime chi e in compagnia)と記述している。また32章では、「毎年、特に年代が新しくなった時に、帳簿を新たにすることは、有名な地域における習慣である。」(el piu si costuma fare per luochi famosi, che ogni anno, maxime a millesimi nuovi),そして第6章では「時々、多くの人々は諸種の場所で、一杯になっていないのにもかかわらず、毎年締切り、再び新しい帳簿にする習慣がある」(alle volte molti costumano in diverse parti, benche non sia pieno, anovalmente far saldi, e anche i libri nuovi)と述べている。

上述の文章をもって、パチョーリが年度決算を知っていたと結論付けることは、多少早計である。しかし、パチョーリが、毎年元帳を締切する方法を知っていたとすることは、正しいことと思われる。

事実、パチョーリ簿記論を例題化したマンゾーニ、カサノヴァ、モスケッティ等は、3月から2月までの1年間を会計期間とし、2月末日にすべての元帳を締切する方法を示している。多分、当時のヴェネツィアには、1年間を会計期間として、元帳を締切する方法が存在していたのであろう。

ヤーメイも、この章は「新しい年の始まりとともに元帳をいかに扱うかを説明している」と記述し、「元帳は毎年締切られるべきである、特にパートナーシップ経営では」と解説している<sup>1)</sup>。

したがって、パチョーリは、元帳の締切時について、元帳がいっぱいになった時と年度の始まりまたはある区切りの時期を推奨したことになるのである。

#### 注

1) Yamey, op. cit., p. 153.

### (8) 損益計算の方法

パチョーリは、損益計算について、第26章と第27章で解説している。第26章は、旅商 (viaggi) に関する損益計算であり、第27章は、商品 (robba) に関する損益計算である。

第26章では、商人自身が出張して商売する場合と自分のために他人に出張を委託する場合の2つの場合について論じている。

自分で出張した場合は、財産目録、小仕訳帳及び小元帳等を作成し、旅商資本金、旅商損益 (pro e danno de viaggio) 等の勘定を設ける。そして、旅商ごとの損益を計算するのである。そして、旅商を他人に委託した場合は、他人が帰宅した時に、清算し、損益を計算するのである。

ヴェネツィアの商人、ジャコモ・バドエルは、元帳 (1436~1440年) の中で、カッフアの旅商、メッシーナの旅商等多くの旅商勘定を記録し、それに関連した損益計算を遂行している。またマンゾーニは旅商勘定を示さなかったが、カサノヴァ及びモスケッティは、旅商別の損益計算を解説している<sup>1)</sup>。

第27章では、商品別の損益計算の手続きについて詳述している。まず元帳の各商品の勘定を締

切り、借方が貸方より大ならば損失となり、その反対なら利益となる。そこで、商品勘定の残高を損益勘定へ振替え、損益勘定の差額を資本金勘定へ振替えるのである。

ただ、パチョーリは、商品勘定の締切りに当り、決算時の商品残高（商品棚卸高）については言及していない。商品棚卸高の説明がなく、商品別損益計算を解説したことは奇妙である。

ドイツでは、シュライベル（Schreiber, 1518年, 1544年）やゴットリーブ（Gottlieb, 1531年, 1546年）等が、商品棚卸高について解説している。

#### 注

- 1) ジャコモ・バドエルの元帳及びマンツォーニの簿記書等については、拙著『イタリア簿記史論』を参照されたい。

### (9) 借方と貸方の説明

パチョーリは、仕訳帳の貸借については11章で、元帳の貸借については14章で解説している。

借方（*Per*）は1人または1人以上の債務者（*debitore*）を示す。そして貸方（*A*）は、1人または1人以上の債権者（*creditor*）を示す。この*Per*と*A*なくして仕訳帳の記入はあり得ない。そして必ず借方を先に記入し、貸方を後に記入するのである。なぜなら、最初に、債務者を明確にし記入し、すぐその後に債権者を記入するべきであるからである。

仕訳帳で記入したすべての項目は、常に元帳でも借方（*dare*）と貸方（*avere*）に記入される。

借方は、債務者を、そして貸方は債権者を示す。そして債務者は左側に、債権者は右側に置くのである。元帳のすべての項目は、関連し合っているため、貸方記入を伴わない借方記入はなく、借方記入を伴わない貸方記入は決してないのである。

かくして、元帳の差引き残高を示す試算表（*bilancio*）が作成されるのである。

パチョーリは、初期の人的一勘定学説（*Personalistische Einkontenreihentheorie*）をもって、貸借関係を解説したように思われる。すなわち、すべての勘定を人格者とみなし、借方と貸方の意義を借方＝債務者（受取人）、貸方＝債権者（授与人）とみなし、すべての勘定は、この原則に適用されると考えたのである。

### (10) 元帳勘定の締切と試算表の作成

パチョーリは、主として第14章と34章で、元帳の締切方法と試算表の作成方法について解説している。まず14章で、「このようにして元帳の差引き残高を示す試算表が生ずるのである」（*E di qua nasci poi il bilancio che del libro si fa nel suo saldo*）と記述している。これは元帳勘定の差引残高を示す試算表を作成することを意味している。したがって、ここでは残高試算表の作成を意味するものと思われる。

前述したように、元帳勘定は、帳簿がいっぱいになったか、年代が変更したか、毎年締切られることとなる。そして第34章は元帳勘定の締切と試算表について詳述している。

まず、現金勘定から始めて、債務者勘定、商品勘定、顧客勘定等を新元帳へ移記するのである。その際、残高を試算表へ移記する必要はないのである。

そして、営業費、家政費、地代、家賃そして収入と支出等の勘定は損益勘定へ振り替えるのである。そして損益勘定の残高は、他の商品、動産及び不動産と同様に、資本金勘定へ振り替えるのである。

この新しい資本金勘定は、常に元帳の全勘定の最後の勘定であるから、資本金勘定の借方と貸方を合計することによって財産の価値を、いつも知ることができるのである。パチョーリは、この資本金勘定に、試算表的検証能力を持たせたように思える。

そして、パチョーリは、34章の中で、勘定の借方合計金額を一枚の紙の左側に、そして貸方の合計金額を右側に示すのである。

次いで、左側・借方の総合計（*summa summarum del dare*）と右側・貸方の総合計（*summa summarum dell avere*）を算出する。そして2つの総合計が等しければ、元帳は正しく記入されたことになるのである。これは合計試算表としての説明である。

さらに、36章で元帳の試算表（*el bilancio de libro*）について解説している。

以上述べたように、パチョーリは、残高試算表、試算表の性格を持った資本金勘定そして合計試算表を解説したことになる。この解説は極めて奇妙な内容となっている。

例えば、14章では残高試算表の作成を提案しておきながら、34章では、その同じ表がたんなる合計試算表に変わってしまったのである。

また、資本金勘定は、全勘定の最後の勘定でありすべての財産の価値は、この勘定で知ることができると言っておきながら、残高試算表また合計試算表が最後の重要な表と説明しているのである。

そして、34章で解説した試算表（*summa summarum*）と36章で説明した試算表（*Lo bilancio del libro*）は、用語は違うが内容は同様のものか、異なるものか明らかでない。

また、2つの試算表は、貸借の合計は等しくなるべきで、等しくない場合は誤りがあると言っている。もし合計試算表とすれば、貸借が一致するのが当然のことであり、検証力はないように思われる。もし、検証力のある残高試算表とすればパチョーリの説明方法が十分でないこととなる。

この試算表問題については、ヤーメイとエステベが詳細な批判を加えている。

例えば、ヤーメイは「この重要な章（=34章）は、2つのまったく理解に苦しむ論述を含んでいる」と指摘している。そして第一の問題点は資本金勘定である。パチョーリの説明した資本金勘定は、二重転記及び純利益の二重計算の可能性があるというのである<sup>1)</sup>。

第2の問題点は、試算表（*summa summarum*）である。この試算表の機能は、まったく明らかでない。これは元帳の正確性を検証する能力をまったく持ち合わせていないというのである<sup>2)</sup>。

エステベも、34章の文章は、理解困難である、そして資本金勘定の転記に関しては、ある混乱を起こしていると述べている<sup>3)</sup>。

ヤーメイやエステベの論文を詳しく紹介するまでもなく、パチョーリが、この部分で混乱し、矛盾を含んだ文章を論述したことは確かである。それでは、パチョーリは、ここで何を言いたかったのかという問題に話を移す。

思うにパチョーリは、元帳締切後の手続として2つの方法を解説したかったのであろう。1つは資本金勘定を最終の勘定としたことである。この方法は、メンハーやステイヴンによっても遂行されている。

もう1つは、元帳締切後の試算表を説明したのである。

しかしこの試算表が、合計試算表のみを意味するのか、残高試算表まで含むのか、明確ではない。

ただし、パチョーリは、解説の内容から残高試算表の知識があったことを解することは可能である。したがってパチョーリが解説した試算表は、残高試算表までを含むと解することとしたい。

#### 注

- 1) Yamey, op. cit., p. 162.
- 2) Yamey, op. cit., p. 163.
- 3) Esteve, op. cit., p. 61.

#### (11) 組合勘定に関する解説

パチョーリは、組合、または会社 (Cōpa=Compagnia) 勘定について、第21章で詳しく解説している。

パチョーリは、会社 (Compagnie) については、スママの第1部第9編の論文第1で詳述している。組合とは、布地、薬味、綿、染料等の取引をする時、他人と共同で行うものである。その場合は、日記帳、仕訳帳そして元帳へ記入するのである。そして、組合現金 (Cassa de Compagnia)、組合員甲勘定 (tale de ragion de Compagnia) 等の勘定科目を用いるのである。

#### (12) 官庁取引に関する解説

パチョーリは、第17章で官庁 (li officii publici) と取引する際の注意すべき事を説明している。国債管理局、フィレンツェの嫁資銀行、ジェノヴァやヴェネツィアの財務局他等と取引をする場合は、いつも勘定の借方がすべて規則的に明瞭に記入されているかどうかを照合し、できれば官庁の書記の自筆の証書をつけて保管しておくのである。なぜなら、官庁では書記がしばしば交替し、いろいろなことで前任の書記を非難し勘定記入をごちゃごちゃにして、勘定の照合ができなくなるからである。ヴェネツィアでは過去に不正をして罰せられた多くの仲介人と書記を知っていると、パチョーリは論述している。

### (13) 一連の取引を基礎とする例題の不作成

パチョーリは、財産目録（第2章）、日記帳、仕訳帳そして元帳（第12章、15章、18章他）等についての個々の例題は示した。しかし、パチョーリの後続くマンツォーニ、カサノヴァ、モスケッティ、シュヴァイケル、ガムメルスフェルダー、インピン等が示したような、仕訳帳、元帳、元帳の締切という一連の取引を作成しなかった。

ただ、パチョーリは、36章の最後に、「元帳記入上の模範例題」を示した。しかし、パチョーリは、この模範例について何も解説しなかった。そして極めて理解しにくい内容である。したがってこの模範例は、後世の多くの学者達の批判の対象となってしまった。

### (14) 貸借対照表及び損益計算書の不作成

上述したように、パチョーリの簿記手続の最終は、試算表である。今日で言うところの貸借対照表と損益計算書は示されていない。多分、知らなかったのであろう。

なぜなら、当時のヴェネツィアでは、いまだ現在の貸借対照表や損益計算書は作成されていないからである。

パチョーリも、損益（*Pe dāno=Pro e dannno*）勘定とピランチオ（*bilancio*）については解説している。

しかし、この損益勘定の内容は、収益と費用勘定を集める集合勘定であって、損益計算書と異なる。またピランチオも、残高試算表の範囲を越えるものではなく、貸借対照表と異なる。

また、パチョーリは、カサノヴァ、モスケッティ、ピエトラ、フローリ等が解説し、例題でも示した残高勘定については解説しなかった。

### (15) 多くの格言や諺を記述している

面白いことに、パチョーリは、簿記論の中に、多くの格言や諺、さらにはダンテの「神曲」や聖書からの言葉を挿入し、商人に対して商売上及び人生上の教育を遂行している。

それらの言葉を、少し紹介しておく。

第4章では、「商人の頭は、百の目を持っていると思われているが、言葉や行動で見ると、百でもまだ十分ではない」、「明らかに目ざめている人と眠らない人を法は助ける」（都市法）、「正當に戦った者以外は君主にふさわしくない」（使者パオロ）、「愛情があれば富を失わないように、ミサを聞けば道を失わない」、「羽根蒲団の上に坐り、毛布の下にねていては名を挙げられない、名声なく一生を過ごす人が、この世に残すものは空中の煙や水中の泡にひとしいものだ」（ダンテの「神曲」地獄篇）等のことが書かれている。

第18章では、「何事もしない者は過ちをしない、しかし何の過ちもしない者は学ぶことができない」と記述している。

### (16) 支店会計について解説

23章において、商人が自分の店（本店）以外に店（支店）を所有し、営業する場合の会計記録方法について説明している。

その場合、支店を他人に管理させる場合と自分で管理する場合の2つの立場から解説している。

### (17) 誤り記入の訂正方法について説明

第31章において、勘定記入を間違えた場合の訂正方法を説明している。この場合は、反対記入により相殺することによって訂正するよう解説している。

## 第3節 あとがき

以上の考察によって、パチョーリ簿記論の特徴とその問題点を、多少窺知できたように思う。

パチョーリ簿記論は、16世紀以後、全ヨーロッパ中に伝えられた。そして各国で出版されたパチョーリ簿記論を基礎とする多くの簿記書によって、その内容の特徴はさらに明確となり、また修正が加えられ、発展していった。

例えば、イタリアでは、ヴェネツィアで簿記文献を1534年に出版したマンゾーニがパチョーリ簿記論を基礎とする一連の例題を作成した。この例題の会計期間は、3月1日に始まり2月末日に終わる1年間であった。当時のヴェネツィアには、すでに1年間を単位とする会計期間の概念があったのである。ただし、マンゾーニは、元帳の締切方法では、パチョーリが解説した試算表ではなく、ただ単に意味のない合計表を作成してしまった<sup>1)</sup>。

同じくヴェネツィアで、1558年に簿記文献を出版したカサノヴァは、会計期間を1年（3月4日～2月28日）とする簿記例題を作成した。カサノヴァは、パチョーリが解説した試算表の性格を持つ資本金勘定を廃止し、残高勘定に諸資産勘定、資本金勘定、損益勘定の残高を集めるという方法を示した。これはパチョーリの元帳締切方法の修正を試みたものである<sup>2)</sup>。

1586年、ピエトラはマントヴァで簿記書を出版した。ピエトラは、1年間（6月1日～5月末日）を会計期間とする修道院をモデルとする簿記例題を作成した。ピエトラは、パチョーリ簿記論に従い、日記帳、財産目録、仕訳帳そして元帳という帳簿組織を解説したが、例題では仕訳帳及び元帳の2冊を採用した。そして、一般残高勘定と一般損益勘定を示し、一般残高勘定に残高試算表（あるいは貸借対照表）としての性格を持たせた。

さらに、資産評価については、時価と時価より低い一般価格について解説した。

ドイツでは、シュヴァイケルの1549年にニュルンベルクで出版された簿記文献によって、パチョーリ簿記論は紹介された。シュヴァイケルは、パチョーリ及びマンゾーニの文献を参照しながら簿記書を完成させた。

シュヴァイケルは、検証能力を有する残高勘定の作成を試みた。しかし、計算実務上、多くの誤りを犯してしまった。



しかし、ドイツにおける、パチョーリ簿記論は、ガムメルスフェルダー（1570年）やゲッセン（1588年）の簿記書によって発展したのである。例えば、ゲッセンは、財産目録、日記帳、仕訳帳そして元帳の他、費用帳や現金帳を解説し、例題では、財産目録、仕訳帳そして元帳の3冊を採用した。例題の会計期間は、1月1日～12月31日までの1年間とし、元帳の決算は、大陸式決算法を遂行したのである。

そしてオランダでは、1543年に、ジャン・インピン・クリストッフエル（Jan Ympyn Christoffel）が、アントウェルペンでオランダ語及びフランス語でパチョーリ簿記論を基礎とする簿記書を出版した。

イギリスでは、1543年に、ヒュー・オールドカースル（Hugh Oldcastle）が、パチョーリ簿記論を解説する簿記書を出版している。

また、インピンの英語版も1547年には出版されたのである。

上述したように、パチョーリ簿記論は、現在の会計学的観点からみれば、その特徴の中に多くの問題点を持ちながらも、ヨーロッパ中に伝わり、修正・改善されながら発展していったのである。

#### 注

- 1) 拙著『イタリア簿記史論』268頁。
- 2) 拙著『イタリア簿記史論』280頁。

## A Study of Certain Characteristics of Pacioli's Bookkeeping Theory

### Summary

Yasuhiko Kataoka

The first book on bookkeeping and accounting published anywhere in the world was Luca Pacioli's "Summa," or in full "Summa de Arithmetica, Geometria Proportioni et Proportionalita". This mathematics book was published in Venice on November 10, 1494. The printer-publisher was Paganino de Paganini of Brescia. The second edition of "Summa" was published by Paganino's son Allesandro on December 20, 1523 at Toscalano on Lake Garda. This large volume consists of 616 pages on 308 folios, and the section known as "Pacioli's Bookkeeping Theory" appears in Part 1, Volume 9, Chapter 11, under the title "Distinctio nona Tractatus XI particularis de computis et scripturis" from the verso of folio 197 until the verso of folio 210. By analyzing the 17 characteristics of Pacioli's Bookkeeping Theory here, I hope to offer a clearer explanation of the theory.

- 1) There are many religious statements throughout the work.
- 2) The three principal things necessary for a merchant are explained.
- 3) The Venetian method of bookkeeping is adopted.
- 4) The "three books" system (day book, journal and ledger) is adopted.
- 5) While it explains about the opening inventory, it does not mention the closing inventory.
- 6) The current value basis, and then the highest price method (the cost or market, whichever is higher method) is adopted.
- 7) Annual closing of books is described.
- 8) Profit and loss is explained according to travel and goods.
- 9) Debtor (dare, debitare) and creditor (avere, debitore) are explained.
- 10) Ledger account closing and the creation of a trial balance are explained.
- 11) Partnership accounts are explained.
- 12) Transactions with public offices are explained.
- 13) It does not create an example based on a series of transactions.
- 14) It does not describe balance sheets and profit and loss statements.
- 15) Many proverbs and sayings are included.
- 16) Branch shop accounts are explained.

17) A method to correct mistaken entries is explained.

Pacioli's Bookkeeping Theory spread throughout Europe from the 16th century onwards. And as the many books of bookkeeping theory based on it were published in each country, the theory's characteristics became more clearly defined, as corrections were made and the theory continued to develop.